

運転員気質

大須賀 安彦

30年或いはそれ以上の年月を運転員一筋に務めてきた人は独特の美学を身に纏っている。運転員のキャリアは現場巡視員から始まり、回転機器の僅かの異音、制御弁の不自然な動き等の見極め方を先輩、上司に教えられて身に付ける。中央制御室でタービン発電機、原子炉設備の操作を担当するようになって上司から細かく指導される。こうして10年、20年経つうち、その仕事振りを認められた者が当直長の職に就く。

発電所の運転は決められた規則に沿って進められるが、細部まで書き物になっている訳ではない。イザと言う時、自分の考えを持って、自ら判断する運転員は、身体で覚えたことしか信用しない。だからこそ、自分の仕事の結果に誇りを持ち、他人に口を挟まれるのを嫌う。

蒸気発生器への給水制御弁を手動で切り替えていた頃、古株の運転員は自分の経験を一杯使って操作し、水位、流量の変化が滑らかに記録されていくことに満足していたことを思い出す。このような運転員気質は日本だけのものでもなさそうである。20年以上前、フランスの発電所で研修をしていた頃、顔見知りになった運転員から「ロードフォロワー運転中の原子炉の軸方向出力分布の動きをグレイロッドの巧みな操作により上手く制御しているだろう」と自慢されたことがある。

しかし、給水制御弁の切り替えは自動化され、運転員が長い間掛かって培ってきた技量を発揮する機会はなくなった。また、デジタル型制御盤の採用により、当直長と部下の運転員の関係も変わりつつある。当直長は若い頃に身に付けた知識や経験で若い運転員の指導することに躊躇するようになっている。操作卓のCRT、VDUによる操作では、パソコンと共に育った若い運転員のスピードに敵わない。在来型制御盤で当直長の目であり、手であった運転員は、口ごもる当直長に戸惑うこととなる。

かつて当直チームには知識と技量に裏打ちされた年功序列型のヒエラルキーがあった。先輩、上司は、若い運転員にとって、単に職制の上位者ではなく知識と技能に優れた存在であった。発電所設備が新しいテクノロジーにより更新されていくスピードと運転員の年代構成との間に微妙に齟齬が生じ始めている。長年当直チームを支えてきたヒエラルキーが崩壊することにより、運転員気質も変わりつつある。何ごとによらず、古いものに代えて新しいものを採用する時には新しい秩序が要る。このことは、複雑なヒューマンインターフェイスを持つ原子力発電所の設備と運営についても当てはまるように思われる。

(大須賀 安彦 さんには、平成20年1月のシンビオ技術交流会で、フルデジタル中央制御室の世界事情を講演いただきました。その後敦賀の原子力訓練センターの第1線から顧問役になられ、このたび本稿を寄稿いただきましたので、まずはシンビオホームページに掲載させていただきました。平成21年4月)